倫風宏話

利他と自利のバランスについて

上廣哲治

今年もっとも注目を浴びた歴史上の人物は、「日本資本主義の父」と称される実業家の渋沢栄一かもしれません。NHKの大河ドラマ「青天を衝け」の主人公であり、三年後に刷新される一万円札の顔になるということもあって、彼の著作や伝記などの関連書籍が書店に並び、インターネット上でも、その生涯や思想が頻繁に紹介されていました。

なかでも多くの人に注目され、取り上げられたのは、渋沢が自著『論語と算盤』などで展開した「道徳経済合一説」「義利合一説」と呼ばれる思想でした。「義利合一」の「義」は倫理・道徳、「利」は経済を表します。つまり、倫理（論語）と経済活動（算盤）をともに重視し、「利他」と「自利」を相反するものではなく、表裏一体のものととらえる思想です。

渋沢は『論語と算盤』のなかで、孔子を信奉する儒学者たちが昔から『論語』の教えを誤って解釈してきたと述べています。その誤解の最たるものは、「倫理・道徳にもとづいて王道政治を行うこと」と「経済活動によって富や地位を得ること」とは氷炭相容れないと考えることです。孔子ははたして、儒

学者たちが言うように「富や地位を得た者に、正しい倫理・道徳の心を持っている人はない。だから、徳を備えた者になろうとするなら、富や地位を望んではならない」と説いたのでしょうか。渋沢は、そのようなことは『論語』のどこにも書かれていないと言います。

では、『論語』には、倫理・道徳と経済の関係についてどのようなことが書かれていたのでしょう。渋沢は次のような箇所を引用しています。

「富と貴い身分とはこれはだれでもほしがるものだ。しかしそれ相当の方法（正しい勤勉や高潔な人格）で得たのでなければ、そこに安住しない。貧乏と賤しい身分とはこれはだれでもいやがるものだ。しかしそれ相当の方法（怠惰や下劣な人格）で得たのでなければ、それも避けない」（金谷治訳）

渋沢によれば、孔子は富や地位の追求自体を否定しているわけではありません。孔子の真意は、「道理をもった富や地位でなければ、むしろ貧乏や賤しい身分にある方がよい。しかし、正しい道理をもって得た富や地位なら、何の問題もない」というところにあります。つまり、お金や身分の有無よりも、それらが正しい道を踏んで得られたかどうかが肝心だと説いているわけです。

渋沢は、「利他」と「自利」の関係についても同様の考えを示していました。商業や工業の目的は利潤を上げることであり、それができなければ意味がありません。しかし、皆が「自分さえよければ他はどうなってもよい」という考えで利潤を求めたらどうなるでしょう。思想家の孟子が心配したように、国は危うくなり、人から奪わなければ満ち足りないような状態になってしまいます。だから、経済活動は本来、倫理・道徳にもとづかなければ長続きするものではないというのが、渋沢の考えです。

渋沢は、自己の利益を追求することは悪いことではなく、自利「のみ」を求めることを批判していま

す。また、他者の利益「のみ」を追求することは、宗教家ならともかく、普通の人にはなかなかできることではないと言っています。大切なのは、どちらか一方に偏るのではなく、調和を保つことであり、そのためには倫理的な基盤をしっかり持っていることが必要だというのです。

現在行われているさまざまな経済活動が、渋沢の言うような利他と自利の調和を保っているかどうかは、冷静に見なければなりません。高度経済成長下の公害を例に挙げるまでもなく、企業も人も往々にして自利「のみ」を追求してしまうか、自利を優先させてしまうからです。また、一見「利他」的な活動をしている会社であっても、社員や非正規労働者、下請けの会社などに対して利他的であるかどうかを検証しなければならないでしょう。「利他」的活動が、企業イメージをよくしたり利益を得るための、ただの手段になっているとすれば、すでに両者のバランスは崩れているということになります。

長引くコロナ禍のなかで、この危機を乗り越えるための鍵として、利他の重要性を説く論客が現れるようになりました。フランスの経済学者にして思想家のジャック・アタリ氏もその一人です。アタリ氏は、「私ファースト」の利己主義者が増えていることを危惧し、その対極にある利他主義こそがこれからの世界を生き抜くための鍵になると主張します。しかし、彼もまた渋沢と同じように、自利を否定しているわけではありません。利他主義を「合理的な利己主義」ととらえ、他者を利することによって自らも利益を得ることができる、と述べています。営利企業も、顧客という他者が満足することで自らの利益を得ることができる。つまり利他主義が自分の利益につながるというのです。

それは個人の生活でも同様です。パートナーや家族が幸福であることは、われわれ自身の利益となり、人類全体が幸福になることも自利につながります。また、利他主義は将来世代に対しても向けられ

なければなりません。子どもたちや未来の人々がより善い人生を送れるための環境や条件を整えていくことは、現在の私たちの生活にとっても大きな利益になるからです。アタリ氏はさらに、人類以外の生命を尊び、自然環境を保護することも利他主義であると考えています。人間は自然の一部なのだから、それらを尊重することは「合理的な利己主義」に関わる問題なのです。

こうしてみると、渋沢栄一の考え方もジャック・アタリ氏の考え方も、実践倫理の基本中の基本である「我も人もの仕合わせ」に通じるところがあるように思えます。

ご存じのように、「我も人もの仕合わせ」の実践は、自らの仕合わせと他者の仕合わせを同等に考え、ともに実現することを目指します。他者が仕合わせにならなければ、自らの仕合わせも成り立たないからです。「家庭愛和」も同様に、家族みんなが仕合わせになって、はじめて自分も仕合わせになれるという考えにもとづいています。つまり、倫理の実践とは、自分のためであるとともに、家族のためであり、まわりの人たちのためであり、究極的には人類を超えた自然のためでもあるのです。

渋沢もアタリ氏も、主に経済という大きな器を対象にして利他と自利の関係を論じているため、日常の実践からは遠い話のように感じられるかもしれません。また利他のつもりで行うことであっても、自らの思い込みやゆがんだ正義感の押しつけとなっては、相手をかえって傷つけてしまうことがあります。それについては、改めて考察していかなければならないでしょう。

しかし、自分「のみ」の発想が、けっして自分のためにならないという基本には変わりがありません。その基本を常に念頭に置き、まず身近な関係、とりわけ家族のなかで、地道に「仕え合う」実践をしていくことが大切です。それはやがて家族の枠を超え、地域へ、社会へと波及していくはずです。